

徳を積む

広島県 天寧寺 住職 小形真哉

仏教の教えにある「徳を積む」とは、善い行いを重ねることです。また「陰徳」とは、人に知られなくとも善い行いをすることです。

私が住職を務めるお寺に、毎朝墓地を掃除して下さる、七十代の女性がいます。その女性は、朝6時頃から2時間もかけて、丁寧に墓地を掃除して下さいます。

お墓の敷地には大きな楠の木があり、常に葉が落ちていきます。落ち葉の時期や風が強い日には、掃除をしても、次の日には前日と同じくらいたくさん葉が落ちていきます。葉はお墓とお墓の間にも落ち、掃除もしづらくとても根気のいる作業です。それを、雨の日以外は毎日して下さるので、感謝してもしきれません。そのことをご本人にお伝えすると、「掃除をするとすがすがしい気持ちになるので、掃除が日課になっています」とおっしゃいます。

人は、誰かに認められたいという欲求が少なからずあります。善い行いをしたら、それを正当に認めてもらいたいと…例えば、電車

で席を譲り、譲られた人が、何も感謝の言葉をかけてくれなかったら、あなたはどのように感じるでしょうか。私でしたら、つい「感謝してくれてもいいのに」と、思ってしまうかもしれません。

「徳」というのは、本来「その人のためになればいい」という心から自発的に沸き起こるものだと思います。掃除をして下さる女性は、人が見ていようと、いまいと、日々掃除をし、徳を積まれています。誰も見ていないところで、善い行いをして、人には認めてもらえないかもありません。けれど、自分の内側にいる仏様はちゃんと見て下さっています。